

國語讀本

高等小
學校用

卷四

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	款	國語項
目		次
全	冊ノ内第	冊
分類 番	第	號

372.81

24585

T1A3

10

Ts21

47704
日十三月二十年三十三治明
書科教用童兒科語國校學小等高
濟定檢省部文

文學博士坪内雄藏著

國語讀本

高等小
學校用
卷四

東京

合資
會社

富山房藏版

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 8 2 3 a

福岡教育大学蔵書

卷四 目次

第一課 武器	一
第二課 各國の軍備	三
第三課 小島勇士	五
第四課 ナボレオンと鐵師	八
第五課 皮膚の養生	十
第六課 奈良の舊都	十二
第七課 張良	十四
第八課 臺灣	十七
第九課 山田長政	十九
第十課 象	二十二
第十一課 生物の競争	二十四
第十二課 飛騨島	二十六

第十三課 南洋諸島	二十八
第十四課 地球はまるし	三十一
第十五課 コロンブス亞米利加を發見す(上)	三十三
第十六課 同 (下)	三十六
第十七課 ワシントン	三十九
第十八課 短篇一束 (大宛の坊僧 孫と捕る奇法)	四十一
第十九課 王政維新	四十三
第二十課 市町村	四十五
第二十一課 商業のすゝめ	四十七
第二十二課 法律	四十八
第二十三課 人によりて法とせしめ	四十九

國語讀本 高等科 生徒用 卷四

第一課 武器

大むかしは、いつこの國の有様も、今の野蠻國と大差なく、人と他の動物とのたかひ、人と人とのたかひ、激しかりしかば、人おのゝ武器を備へて、自ら身を護る必要ありき。

今日の如く、警察官あり、裁判官ある世

には、たとひ、争ひ起こることありとも、自ら、武器を取りて、是非を決する必要なく、また、しかせざるを正しとす。されど、國と國との争ひは、今も、尚ほ、戦争によりて、是非を決せざるを得ざることもあり。武器の必要ある所以なり。

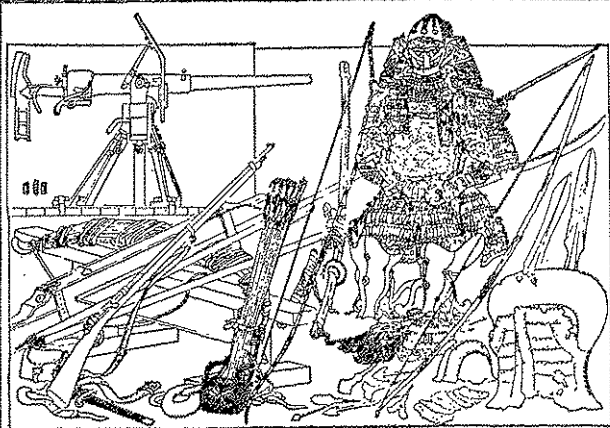
武器の種類は、國と時代とによりて、著き相違あり。世の中、未だ開けざりし頃には、石にて、斧、刀、鏃ヤツなど作りしが、鑛物を

斧

※ ※

※ ※

劍戟



鑛かすことを工夫するに及びて、種々の劍戟出来、甲冑類も出来たり。甲冑もに、封建時代と呼ばれたる頃に重ぜられき。

西洋にては、今よ

り四百五十餘年前に、始めて、火薬を、戦争に用ふることゝなり、鐵砲出來たり。これより、總躰に、戦争の模様變はり、兵制も改まりき。

かくて、理化學の進歩するにつれて、火薬使用の方法は、ますます、巧妙になりて、今日の如き、精銳驚くべき火器を造り出だすに及びたり。しかも、尚ほ、あきたれりとせぬ有様なれば、將來の進歩は、豫め

光器

はかり定めがたし。但し、武器は、兇器なるゆゑに、止むを得ざる場合にのみ用ひらるゝものたるを忘るべからず。武器の用は、多く人を殺すにあらずして、成るべく早く、勝敗を決し、争ひを止むるにあることを忘るべからず。

第二課 各國の軍備

世界各國、皆、國土、人民を保護せん爲め

※

※

※

約

に、軍備を有す。其の國の位置と事情とによりて、或は海軍に重きを置き、或は陸軍に重きを置く。

英國の如きは、島國なるが上に、諸處に屬國、殖民地等多ければ、昔より海軍に重きを置けり。現に、其の海軍力は、我が國の比して、約そ八倍半なり、といふ。これに次ぐものは、佛蘭西なり、其の勢力、我れのに三倍せり。露國の海軍力は、我れ

のに二倍半にして、獨逸、伊太利等、之れに次ぐ。その他の諸強國は、大差等なし。陸軍に重きを置ける國は、露國を第一とす。その勢力は、我れのに九倍せり。英、獨、佛は、之れに次ぐ。ともに、我れのに優ること五倍なり。但し、陸軍は、各國とも、平時と戦時と同じからざるが例なり。我が國にても、戦時には、平時よりも二倍せらるゝを定めとす。合衆國の如

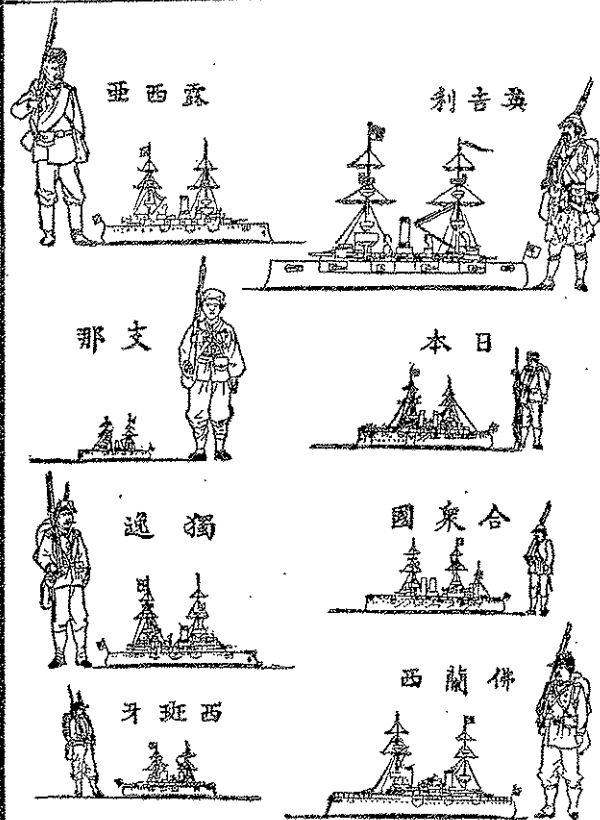
斷米

きは、尤も甚しく、平時は、我れのと大差なきも、戦時に至れば、我が我時のに比して、凡そ三十四倍なり、といふ。されど、斯の如きは、例外なり。通例は、二倍又は三倍となるに過ぎず。

隻

我が隣邦なる支那、朝鮮は、その軍備ゆたかならず。支那の陸軍は、平時六十萬と稱すれども、其の實力は弱く、海軍も亦た、わづかに十二隻の軍艦より成る。朝

注 敵 軍 兵 隊 大 隊 以 上 大 隊 以 下 敵 軍 兵 隊 大 隊 以 上 大 隊 以 下



鮮に至りては、陸兵僅かに六千に足らず
海軍は、全く無し。

第三課 小きき勇士

おとなであれば、我れもまた、
あの兵たちともろともに、
みくにの爲めに出陣し、
功名、手柄をせうものを。
彈丸などはこはくなし、

出陣
手柄

哨兵
立派

＊ ＊

勲章

爆裂彈もこはくなし。
哨兵、見事に務めうに、
立派に、傳令せうものを。
おとなであれば、我れもまた、
あの兵たちともろともに、
敵の砲臺攻撃し、
一番乗の手柄して、
勇士々々、とほめられて、
勲章貰って、名を揚げて、

※

と、さまか、さま喜ばせ、
歴史に、名前を書かれうに。
強きは、おとなに劣らねど、
勇氣も、おとなに負けねども、
年足らぬゆゑ、かひもなや、
軍に出ること、まゝならぬ。
此の身、おとなとなる頃は、
いくさすむべし、敵なくば、
手柄せうにも、すべなし。と、

論

※

※

※ 邪念

柔順

「小きき勇士」は悔みけり。
母、これをき、諭す様、

攻めて、勝つべき大敵は、
銃持つ兵に限るかは、

すぐれて強き武人さへ、

え勝たぬは、「胸の敵」ぞかし。

「胸の敵」とは、我が胸に、

ともすれば起こる邪念ぞよ。

まづ第一は、不柔順、

算盤

自分勝手や、うそ、なまけ、
かゝる邪念といくさして、
いつも打ち勝ち、めいゝの
務めくをしとぐるを、
すべて、勇士といふぞかし。
銃、手に取るも、國の爲め、
鋤、手に取るも、國の爲め、
鑿、筆、算盤、取る品は、
務めくで、異なれど。

克

※

おのれに克ちて、國の爲めに
勤むれば、皆、勇士ぞや。
敵は、おのれの胸にあり、
しばしも、心ゆるむるな。
心の敵に克つときは、
こはきものなし、さる人に
向ふ敵なし、家の子よ、
先づ、此の敵に克ちならへ。

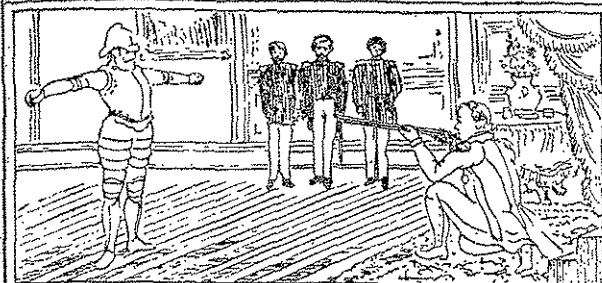
第四課 ナポレオンと鎧師

名高きナポレオン第一世は、一平民の子なりき。されど、内外の戦争に、大功ありしかば、遂に、佛蘭西皇帝の位に登り、歐羅巴の列國と戦うて、大いに勝ち、武名を、全世界に轟かしき。

その頃、パリの都に、名高き鎧師ありしが、ある時、人に語りていふ様、我れ、この頃、アルミニウムにて、鎧を造ることを工

夫せり。アルミニウムの鎧は、彈丸も、とほす能はず、且つ、輕きこと、革に等し。但し、原料高價なれば、貴人のもとめにあらざれば、造り難し。と。

ナポレオン、之れを聞きて、件の鎧師を召し、資を與へて、アルミニウムの鎧を造らしめしに、百餘日にして、成りぬ。其の鎧を檢するに、細工、いかにも精妙なりければ、ナポレオン、鎧師に向ひ、彈丸とほす



か、とほさぶるか、我れ、即坐
に試みんと思ふが、汝、よく
此の鎧を着して、我が前に
立つべしや。と問ふ。

鎧師、おめたる色なく、心
得候。とて、直ちに、伴の鎧を
着し、室の中央に立ち出で
けり。

ナポレオン、鎧を取り、彈

※

自若

※

丸を込めて、放たんとすれど、鎧師は、神色
自若として、恐るゝ色なし。ナポレオン、
鎧をすてゝ、いふ様、精神をこめて造りた
る品なれば、自信のほど、さもあるべし。
ためすに及ばず。とて、あつく、鎧師を賞し
き、とぞ。

第五課 皮膚ノ養生

皮膚

皮膚ハ、薄ク、ヤハラカナレドモ、強クシ

絶孔	*	疵	*
ナドヲ出ダシ且ツイサ、カ呼吸作用ヲ		ノ城壁トモ稱スベシ。	
シ、皮膚ニハ、數多ノ小孔アリテ、絶エズ、汗		皮膚ノ、如何ニ大切ナルカハ、疵口ヨリ	
ベストノ黴菌の如キ、其ノ一例ナリ。蓋		傳染スル病毒多キニヨリテモ、知ルベシ。	
シ、疵口ニハ、皮膚ノ備ナケレバナリ。			

弱	*	粘着	塵埃	潤	抵抗
モナス。皮膚弱ケレバ、外界ノ惡氣ニ侵		サレ易シ、感冒ノ如キハ、其ノ一例ナリ。		コトヲ第一トス。而シテ、之レガ爲メニ	シ、皮膚ヲ强健ナラシメテ、外氣ニ抵抗
皮膚ノ養生ハ、之レニ粘着セル脂、汗、垢、			塵埃等ヲ除キテ、十分ニ清潔ナラシムル	ハ、入浴ト、襯衣ノ交換トヲ、適當ニ行フベ	シ。朝、冷水ヲ、全身ニ注ギ、又ハ、冷水ニ潤
ヘル手拭モテ、全身ヲ拭フナドモ、頗ルヨ					

※

スルカヲ増ス效能アリ。衛生ノ第一歩
トシテ、カメ行フベキコトナリ。

※

皮膚ハ、マタ、體溫ヲ、程ヨク調ヘテ、人體
ヲ保護スル作用ヲナス。然レドモ、其ノ
作用ニ限リアレバ、平生、衣服ノ品質ヲ選
ビテ、暑サ、寒サノ度ニ應ゼザルベカラズ。
毛織物、木綿物ハ、外熱ヲ防グ爲メニモ、體
溫ヲ保ツ爲メニモ善シ。

第六課 奈良の舊都

京都七條より、汽車にて、南へ行けば、二
時間餘りにして、奈良に着す。奈良は、舊
き都のあととなれば、名所多し。

市街の東には、春日山、三笠山などあり。
三笠山の麓なる春日神社は、天兒屋根命
を祀れるにて、境内には、老杉あまた生ひ
茂り、社殿は、奥深くして、莊嚴なり。人に
馴れたる鹿群をなして、林間に遊ぶ。

刷

莊嚴

祀

讀

本

高等科生徒用卷四

十二

富山房藏版

※ ※

春日山の東北に、芳山^{ヨシヤマ}あり、花山^{ハナヤマ}あり。以上四山は、もとは、春日神社の境内なりしが、今は、三笠山の外は、皆、公園となれり。市街の東北に、東大寺あり、名高き大佛は、こゝに安置せらる。像は、高さ五丈三尺五寸あり。其の昔、聖武^{ショム}天皇の勅願によりて、建立せるものにて、これを鑄造するには、金銅九十萬斤を費しきとぞ。當時は、佛法の最も盛なりし時なり。當

※ ※ 寶庫 博物 什物 彫 影 ※

東大寺の正倉院^{ショウソウイン}には、多く、聖武帝の御遺物を藏めたり、歴代勅封の寶庫たり。美術の模範となり、歴史の参考となるべき珍品少からず。奈良博物館にも、當時諸社寺の什物を集めたり。猿澤^{ササケ}の池は、水清くして、岸には、衣懸柳^{キカケヤナギ}、枝を垂れ、南圓堂、五重塔など、影を映して、風景、繪の如し。加ふるに、二月堂、三月堂、法隆寺^{ホリウジ}などの建物、いづれも、皆、奈良朝時

代の遺蹟なれば、奈良に遊ぶときは、さながら、舊き歴史畫の中をたどる心地す。

此の地に、都の置かれたりしは、今より千百餘年前、元明天皇の御代なり。それより七代、七十餘年の間、帝都たりき。その時代を、奈良朝時代といふ。當時所謂奈良の都は、今よりも、はるかに廣く、皇居は、今の市街を距る、西一里許なる佐記の邊にありき、といふ。

＊

＊

＊

第七課 張良

古木繁りて、しんくくと、

晝も小暗き細谷川、

瀬音ばかりぞさわがしき。

白髮黃衣の翁あり、

驢馬にまたがり、飄然と、

土橋の上にさしかゝる。

かなたよりも、一青年、

長劍横たへ、來かゝりて、

飄然

翁

＊

＊

※ 沓 ※ 傲然



橋の上にて、行きちがふ。
老人の沓、いかにしけん、
かたしぬけ落ち、谷川の
浅瀬にもまれ、流れゆく。
「やい、若き男、あの沓とれ。
傲然として、命じける。

青年、怒る色もなく、
急ぎ、岸べにおりたちて、
流れゆく沓追ひとめて、

※ 笑



取りて出だせば、馬上ながら、
「はかせよ」と、足をふみのばす。
餘りの無禮と、一たびは、
怒る心もおこりしが、
老人なれば、と思ひかへし、
いとねんごろにぞはかせける。
翁に、こと打ち笑みて、
「見上げたり、わかうどよ。
其の忍耐を見る上は、

ひそかに教ふる事のあり。

五日の後の夜あけがた、

こゝに來りて、我れを待て。」と

いひすて、やがて、立ち去りぬ。

青年、ふしぎと思ひしが、

仔細あらんと、五日の後、

ひき明けがたに來て見れば、

翁は、既に、橋に在り。

あゝ遅し／＼、なまけもの、

付細

*

その性根にては、教へがたし。

また五日の後、出直せ。」と

罵りて、やがて、立ち去りぬ。

また五日たちて、來て見れば、

このたびも、翁、既にあり。

「遅し／＼。」と腹立ちて、

「また五日後」と約束す。

青年、きつと思案なし、

三たび目は、いねず、前夜より、

罵

*

稱讃

橋にたち出で、待ちければ、
老翁來り、稱讃し、

此の心がけありてこそ、
大事をなすに足るべけれ。

何事も、剛毅、忍耐ぞ。

今しも、天下亂れたり、

此の一卷を熟讀し、

賢き君の輔佐となり、

四百餘州を鎮めよと、

輔佐

忽然

兵書を授け、忽然と、

いつこともなく去りにけり。

青年、教へにしたがひて、

學ぶ兵書の功積みて、

他年、高祖を助けつゝ、

亂れし世をぞ鎮めける。

前漢の世の張良と、

智勇の美名を傳へしは、

此の青年とぞ聞こえける。

*

*

*

剛毅

*

第八課 臺灣

臺灣は、琉球の西南、百餘里のかなたに在る島なり。西は、臺灣海峡を挟みて、清國厦門と相望み、南は、バシイ海峡を隔てて、フリピン群島と相對す。南北百餘里、東西四十餘里、全島の面積は、九州よりも稍小なり。

地勢は、龜の甲に似て、中央廣く高し。

*

突元

富士山よりも高しといふモリソン山、突元として、こゝに聳ゆ。この山、今は新高山といふ、日本第一の高山なり。

乾燥

砂礫
漲溢

填塞

河流は、山間より發して、急に、東西の海に注ぐ。乾燥の候には、水、悉く涸れ、河底、道路の如くなることあり。されど、降雨の季となれば、水漲溢して、砂礫を流し、屢、河口を填塞す。河流の最大なるは、淡水溪にして、大肚溪、濁水溪等、これに次ぐ。

市邑の大なるは、南部に、臺南、打狗、鳳山、中央部に、彰化、嘉義、北部に、臺北、滬尾、基隆、大姑陷、新竹等あり。そのうち、最も繁華なるを、臺南、臺北とす。臺北は、總督府の在る處なり。

基隆は、臺北の東北に位せる良港にして、基隆鐵道の起點たり。其の他、淡水、安平、打狗の三港にも、百貨輻湊して、貿易頗る盛んなり。

輻湊

※

※

肥沃

氣候は、全島おしなべて炎熱なれど、極暑の候にも、海風の來るあれば、堪へ難きほどには至らず。土地は肥沃にして、植物、よく繁茂す。茶、甘蔗、米、樟腦、玉蜀黍、蕎麥、椰子、あなす等を、著名なる產物とす。山には、多く、石炭を産す。

占領

此の島、もとは、未開人のみ住みたりしが、一時、和蘭人に占領せられ、のちには、明人の子鄭成功が有となりき。鄭成功、一

名を國性^{コクセイ}爺^{ニヤ}ともいふ。和蘭人を破りて、本島に據り、明朝の再興を計りしが、其の子の時に至りて、清國の爲めに滅ぼされき。爾來、此の島は、清國の領地たりしが、明治二十七八年、征清の役後、その近傍の澎湖列島と共に、新たに、我が國の版圖となりぬ。

版圖

滅

第九課 山田長政

山田長政は、駿河國^{ソウラ}藁科^{カウカ}の人にして、通稱を、仁左衛門^{ニサエモン}と云へり。若き頃より、大志ありて、好みて、兵書を讀みけるが、時しも、徳川氏の初めにて、天下漸く平かなりしかば、長政思へらく、今の時、内國にありて、英名を博せんこと、甚だ難し。海外に赴かば、或は、吾が雄志を伸ぶるを得んと。やがて、密かに、貿易船に乗り込みて、臺灣に到り、つゞいて、暹羅^{シヤム}に渡りぬ。時に、年

密 * *

賣

本

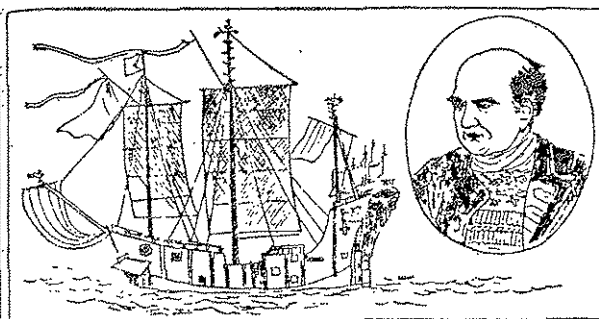
高等科生後月老四

二十一

富山月 瀬川

その頃暹羅は隣國六昆と戦ひて屢敗軍せし際なりければ國王長政が兵法にくはしきを聞きて召して其の意見を詢ふ。長政種々の奇策を獻じければ國王大いに喜びて長政を上將軍に任じ委ぬるに六昆征討の事を以てせり。

二十一
富山号反



ず。長政、其の逃ぐるを追うて、六昆の都に攻め入り、遂に國王を擒にして、歸りぬ。

暹羅王、大いに悦び、長政の功を賞して、其の女をめあはせ、且つ六昆の王に封じ、暹羅の國政をも委ぬき、かゝりしか

赫々 組 辭 獄

ば、長政が威名、赫々として、四隣に震ひき。暹羅王殂し、其の子、位に即くに及びて、長政、職を辭して、六昆に歸りぬ。其のち、程もなく、奸臣等相謀りて、新王を弑し、其の位を奪ひしかば、長政大いに怒り、直ちに、義兵を起こさんとせしが、却つて、奸臣等に計られて、毒殺せられき。

長政、暹羅にありて、富貴を極めたりしが、尚ほ、日本を懷ふ心深く、屢、産物を、幕府

第十卷

新
鋭敏

キテ、高く、遠く擲チテ、死ニ至ラシム。

象ノ鼻ハ、感覺モマタ、鋭敏ナリ。ソノ

サキニテ、自在ニ、蛇、蠅ナドヲ逐ヒ、甚ダ微

小ナルモノヲモ拾フ。

湖沼

象ハ、浴スルコトヲ好ム。時ニ、湖沼ニ

近ヅキ、鼻ヲ以テ、水ヲ吸ヒ上ゲ、サテ、之レ

ヲ、體ニ注グコト數時間、巧ミニ、ソノ全身

ヲ洗フ。

其ノ群ヲナシテ、森林ヲ過グルヤ、若キ

隊伍

※

象、牝象ナドヲバ、其ノ中央ニシ、其ノ年長ナルガ、前後ヲ固メ、隊伍ヲ整ヘテ、進行スルヲ例トス。如何ニ、防衛ノ用意ノ細ヤカナルカヲ見ルベシ。

※

第十一課 生物の競争

動物が、生れながらにして、自衛の具を備ふる由は、既に、前に説きたるが、植物にも、それに似たることあり。薔薇、あざみ

などの刺ある、いらぐさの、毒汁を出だすなど、其の一例なり。これ等をば、植物の自衛とも名づくべし。

動植物が、かゝる自衛の具を要する理如何。

地球の廣さには、限りあれども、動植物の繁殖には、限りなし。限りある場處には、限りなき物を容るゝ能はざる故に、生存の競争起こる、蓋し、自然の勢なり。

＊ 窺

むかし、支那に、莊子といふ人あり。或時、鷲の澤におりゐて、何物かを窺へるを見、之ねを捕へんとして、竊かに、杖を取りて、近づきしに、鷲逃げず、近づき見れば、鷲は、一つの鰕をねらひて、人の迫るを知らず、鰕は、亦た、一つの小蟲を食はんととして、鷲の窺ふを知らぬ様なり。莊子、これを見て、覺えず、杖を棄てゝ、歎じきとか。こは、慙に、眼くらみて、災の身に迫れるを知

諷諭

※

らざる者を諷したる喩へなるが、生存競争の趣は、ほゞ、之れに似たり。生物は、相撃ち、相食まんとして、隙を窺ふ。優勝劣敗の理に外るゝものなし。

炎天
焦土
徘徊

動物は、生存の競争、特に甚しく、或は、居處を争ひ、或は、食物を争ふ。彼の蟻は、炎天に、焦土を徘徊し、蜘蛛は、網を懸けて、小蟲を待つ。魚類の如きは、同類、常に相食み、甚しきは、其の子をも食ふ。競争、かく

※※

※

の如く激烈なり。その自衛の具の必要なる所以を察すべし。

動植物が、自衛の具を備ふるに至りしは、進化の結果なり、とぞ。其の境遇と、必要とに驅られ、永久の年月中に成りたるなり。例へば、尺とり蟲が、敵にあへば、忽ち、枝の如き形をなすは、初めより然りしに非ず、偶然に、枝に似たりしものが、燕、雀などの目にとまる事少くして、危害を逃れし

より、其の種繁殖し、且つ、其の子は、遺傳を受けて、益、此の如き動作をなすに至りしならん。其の他、色により、武器により、惡臭によりて、生存を全うする者、皆、然らざるはなし、といふ。

第十二課 珊瑚島

太平洋、又は印度洋の、赤道に近き海中には、往々にして、奇異なる形したる島あり。

其の島は、譬へば、環の如き形して、漫々たる海水を圍繞し、島上には、椰子樹の類繁茂す。風景頗る愛すべし。この類の島を、珊瑚島と名づく。

珊瑚島は、珊瑚蟲と稱する、小さき蟲の造りたるにて、島とはいへど、通常の島にあらず。

珊瑚蟲は、そも、如何にして、かゝる島を作るか。珊瑚蟲は、甚だ微小なるものに

環繞
圖

*

*

*

*

讀

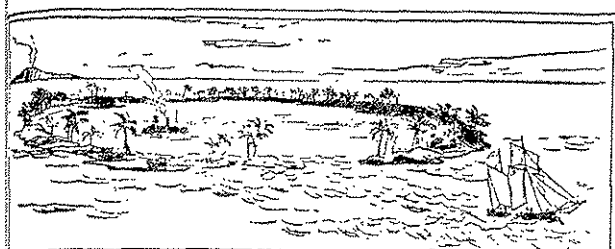
本 島等斗主走月卷口

二十七 一 富山戸浦片

島嶼

炭酸

分泌



して、動物中の下等なるものに属す。この蟲、幾千萬とな
く、一處に群生し、海底、又は、島
嶼の周圍に居り、生長するに
つれて、炭酸石灰と名づくる、
骨の如き一種の物質を分泌
す。この骨質は、珊瑚蟲死す
るも、後に残りて、堅き岩とな
り、次第にかさなりて、遂に、水

波濤

葉

面に現るゝに至る。水面に現るゝに及
べば、珊瑚蟲の工事終る。然れども、波濤
の、其の上を越ゆるや、砂利、又は、珊瑚の碎
片などをうち上げ、多年にして、波の及ば
ざる高さに達せしむ。さて、風や潮につ
れて、近傍の陸地より、草木の種子漂ひ來
りて、附着し、やがて、根を生じ、枝葉を生じ、
叢をなし、一種特別なる島を成すに至る。
珊瑚島の大なるものは、其の周圍一里

※ 暴風 船 避

に餘る。故に、そこに、家屋を構へて、人の、之れに住めるものあり。島の環内は、水、甚だ静かにして、自然の良港をなせり。故に、暴風にあひたる船舶、難を、此の島に避くること屢あり、といふ。

第十三課 南洋諸島

南洋諸島は、一名を、オシアニア洲ともいふ。我が國の南の方、太平洋中に、赤道

※ 島

に跨りて散在せる島々なり。島々の總面積は、大凡七十六萬方里。大別して、マレーシヤ、オーストラルエーシヤ、ポリネシヤの三部とす。

除

マレーシヤは、フリッピンとマレーとの二群島より成る。フリッピン群島は、ミナナオ島の西半部を除くの外、大抵、北米合衆國領にして、我が臺灣を距ること遠からず。群島中の大なるを、呂宋島とす。

今より二百七八十年前には、我が國人の、此の島に移住せし者多かりき。首府を、マニラといふ。物産は、煙草を最とし、砂糖、珈琲、及び、黒檀、白檀等の良材を輸出す。マレー群島のボルネオ島は、大半、和蘭に屬し、多く、黄金、金剛石等を産す。

オーストラルエーシアの中に於て、最も大なる島を、オーストロリヤとす。其の面積、殆ど、我が國の十四倍あり。此の島、

※
真珠
珊瑚

初め、和蘭人の發見せる所なりしが、のち、英國に屬し、漸次、農業開け、工業起こり、採鑛、漁獵の利、また少からず。産物には、羊毛、獸皮、石炭、真珠、葡萄、金、錫等あり。

オーストロリヤに次ぎて大なるは、タスマニヤ、ニューギニヤ、ニュージランドの諸島にて、共に、漁業盛んなり。此等の島々には、我が労働者の移住して、其の業に従事せる者多し。

ポリネシヤ諸島の中にて、我が國と、最も密なる關係あるは、サンドキチ島、即ち近年米國領となりたる布哇なりとす。

布哇は、二十餘の島々より成り、其の面積、我が國の四國に比すべく、人口凡そ八萬六千餘、土人は、その半數にして、他は、皆、諸外國の移住民又は出稼人なり。就中、我が國人最も多く、殆ど、全人口の四分の一を占む、といふ。

出家

匹敵

ホノル、府は、此の國の大都にして、今より四十年前までは、土蠻の部落、處々に散在せる荒野なりしが、今は、我が横濱にも匹敵すべき、盛大なる港となれり。

布哇の、我が國と、交通貿易を約せしは、明治四年にして、我が國へは、主として、砂糖を輸入し、我が國よりは、茶、絹布、綿布、石炭、雜貨等を輸出す。

第十四課 地球はまるし

(第一回)

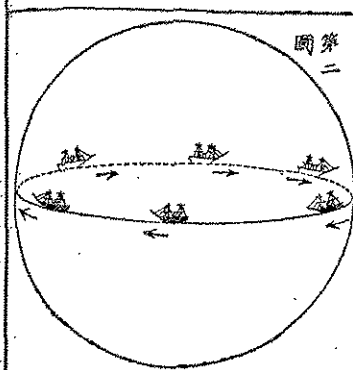
我々の住める地は、常に居すわりて、どこまでも平たきものゝ如く見ゆれど、その實は、然らず。形は、グロイド橙の如くまるく、且つ、空間に懸りて、絶えず回轉す。

試に、海岸に立ちて、雙眼鏡にて、出帆する船を見よ。遠くなるにつれて、船舳先づ隠れ、帆の下部隠



れ、遂には、その上部も亦た、隠るべし。又、沖より、港に入る船を見よ。初めのうちは、帆の上部のみ見え、やゝありて、その下部も見えはじめ、遂には、船舳までも見ゆるに至るべし。地球が、平たきものならば、船は、どこまでも同じ様に見ゆべきに、然らざるは、其のまるき證據なり。第一圖を檢せよ。

又、或港より出帆して、限りなく、西の方



へ航海すと思へ。地球が平たきものな
らば、船は進むにつれて、もとの港に遠ざ
かるべき筈なれど、然らず。實際は、限り
なく西行すれば、船は、遂に、東なる、もとの
港に歸り來べし。東へ
行くも、南へ行くも、北へ
行くも同様の結果を見
ん。これまた、地球がま
るき故なり。地球一周

※ 解

の状を、上の圖によりて、さとるべし。
地、實に平たくば、いつこかに、端のある
べき筈なり。然るに、未だ曾て、これを見
出し、者なし。端なき一證にあらずや。
既に、端無しとすれば、地面は、限りなく續
きたるか。然らば、日月は、いつこより出
入するぞ。平たしとすれば、解すべから
ざるにあらずや。

地球が球形なる由は、これ等の理によ

りて、ほゞ想像するに足るべし。

第十五課 コロンブスの亞米利

加發見(上)

西洋諸國も、まだ、今日程には開けずして、地球のまるき由すら知られざりし頃、伊太利のゼノアに、コロンブスといふ人ありき。父は、羊毛商にして、家貧しかりしも、教育には、力を盡し、子等をして地理、

學科

風

數學、航海、天文等の諸學科を修めしめき。加ふるに、ゼノア人は、主として、海上の生活を営みしかば、コロンブスの如きは、此の風習に感化せられ、十四歳の頃より、水夫となり、風に、航海術に長じたりき。その頃、歐羅巴より、亞弗利加の南端を廻りて、亞細亞の印度に到る新航路始めて開かれければ、航海の事業、日を逐うて盛んになりぬ。

陸

コロンブスは、多年の研究によりて、地球のまるきことを信じてければ、思ふ様、若し、東へ航して、印度に到ることを得ば、西、大西洋を經ても、亦た、印度に到るべき筈なり。見馴れぬ器物、草木の、海上に漂ひ來るを見れば、いよく、人知らぬ新國土の、西の方にあること明かなり。西に航して、印度に達するの路を開かば、大なる功ならんと。世人が、南、東の航路にの

み注目せる時、コロンブスは、獨り、西航の志を起こしけり。

されど、身貧しければ、自費にては、如何ともし難く、先づ、ゼノアの有力者を説きて、航海の資を求めけれども、耳を傾くる者、絶えてなかりき。次に、葡萄牙に赴きて、其の國の王を説きけれども、これまた、何の効もなかりき。更に、西班牙の王に謁して、熱心に意見を述べけれども、ここに

米

謁

ても志を得ざりしかば、此の上は佛國、英國を頼むの外なしと思ふ折から、西班牙の皇后イサベラ深く、コロンプスの志を憫み、寶玉類を典賣して、巨額の金額に代へ、之れを、コロンプスに賜ひけり。

かくして、航海の資金だけは調ひけるが、水夫、同伴者を募るに及びて、いづれも、死地に就く思ひをなし、募集に應ずる者少かりき。然れども、百方周旋して、辛う

調賣
典賣

周旋

じて、三艘の大船と、九十人の水夫とを得たりければ、西洋紀元一千四百九十二年、遂に、西班牙の港より、出發しぬ。時に、コロンプスは、齡五十七歳なりき。

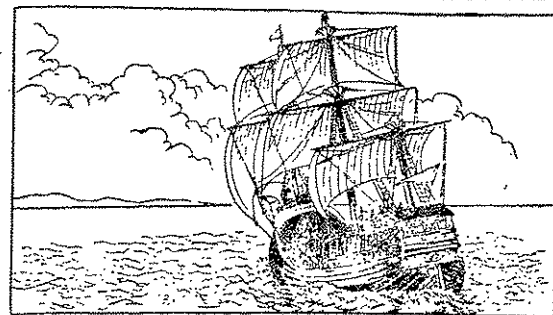
第十六課 コロンプスの亞米利

加發見(下)

さて、大西洋を進み行くこと數日にして、その頃の人々が、地球の西の端と信ぜ

舵

海原



しカナリ一島をさへも
後にしたり。かくての
ちは、行けどもく、眼に
入るものとは、只、茫々
たる海原と、大空とのみ
なりけり。
或時は、暴風に遇ひて、
帆を破り、舵を損ぜしこ
ともあり、或時は、新陸の

一團

※

※蒙昧

疑

怨

山かと思ひ、頼もしく思ひし黒きものが、
空しく、一團の浮雲と消え去りしことも
あり。心細さは、云はん方もなかりき。
蒙昧なる水夫等は、漸く、覺束なく思ひ
始めき。彼等は、新陸の發見を、疑はしく
思ひ、且つは、漂流を危む餘り、或は怨み、或
は怒り、コロンブスを非難して、罵り騒ぐ
こと限りなし。然れども、コロンブスは、
もとより、命をかけて金でしことなれば、

* 莫大 *

かばかりの事に、動ずる筈もなく、若し、新國を發見せば、莫大の賞を與ふべければ、今暫くの間、辛抱せよ。」と、様々にすかして、水夫等の勇氣をつながしめき。

* 派遣 *

かくて、二箇月に及びけれど、陸地の影だにも見えざりければ、水夫等の絶望は、愈、甚しくなりぬ。果は、無智の水夫のみならず、西班牙の朝廷より派遣せられたる輩さへも、漸く、反抗の色を顯し、中には、

*

コロンブスさへ無くば、歸國することもあり、自由なり、と思ひて、殺意を抱くものあるに至りしかば、コロンブスも、是非なく、けふより三日の中に、新陸を發見せずば、歸國の途に上るべし、と約束しぬ。

*

かくて、コロンブスは、夜の目もあはせで、甲板に立ちつくしけるが、約束の三日の期限も、はや絶えなんとせし其の日の夕べ、珍しくも、細工を施せる木片、果樹の

*

枝鳥の巢など、波に漂ひて、流れ來りぬ。さては、陸地も程遠からずと、悦び勇みしかひありて、夜に入りて後ち、地平線上に、數點の火光を認め、翌十月十二日の朝には、陸地見ゆ。といふ叫び聲、後ろの船より發せられき。船員一同、狂氣の如く、甲板にかけあがりて、向ひを望めば、次第に薄らみゆく朝霧の下に、まさしく、一帯の陸地横はれり。これ、今の北亞米利加の大

米

齋

陸に近き島なりしなり。此の時、コロナスが心の喜び、果して如何なりしぞ。かくて、コロナスは、此の發見の報を齋らして、一旦、西班牙に歸り、さて、再三、この地に航し、千四百九十八年に至りて、はじめ、亞米利加の大陸に上陸しき。

第十七課 ワシントン

彖

北亞米利加の豪傑にて、はじめ、獨立戰

讀

本

島等斗主走用卷四

三十九

一、日本書紀卷之四

争の大總督となり、のちに合衆國最初の
大統領となりしジールジ・ワシントンは、
今より百七十年ほど前に生れたり。
その頃、今の合衆國は、英國の領地なり
しが、英國政府、虐政を施しければ、國人憤
激し、終に協同して、叛旗をひるがへしぬ。
其の時、獨立軍を指揮して、英軍を破りし
は、ワシントンの功なり。
件の戦争の折柄なりき、さる工兵曹長、

總督

*

争の大總督となり、のちに合衆國最初の
大統領となりしジールジ・ワシントンは、
今より百七十年ほど前に生れたり。
その頃、今の合衆國は、英國の領地なり
しが、英國政府、虐政を施しければ、國人憤
激し、終に協同して、叛旗をひるがへしぬ。
其の時、獨立軍を指揮して、英軍を破りし
は、ワシントンの功なり。
件の戦争の折柄なりき、さる工兵曹長、

虐政

憤激

* 指揮

工兵一分隊と共に、さる處の壘の上に、梁
材を引き上ぐる爲めに送られけり。人
手足らざりしかば、工事いと困難なりし
に、曹長は勿躰ぶりて、あたりを徘徊し、只
口さきにて、指圖を爲すのみ、聊かも、力を
添ふることなかりき。
時しも、平服の一官吏、馬上にて、この處
をよぎりけるが、曹長の振舞を、餘りとや
見たりけん、立ち寄りて、會釋し、人手足ら

梁壘

*

工兵一分隊と共に、さる處の壘の上に、梁
材を引き上ぐる爲めに送られけり。人
手足らざりしかば、工事いと困難なりし
に、曹長は勿躰ぶりて、あたりを徘徊し、只
口さきにて、指圖を爲すのみ、聊かも、力を
添ふることなかりき。
時しも、平服の一官吏、馬上にて、この處
をよぎりけるが、曹長の振舞を、餘りとや
見たりけん、立ち寄りて、會釋し、人手足ら

*

*

會釋

工兵一分隊と共に、さる處の壘の上に、梁
材を引き上ぐる爲めに送られけり。人
手足らざりしかば、工事いと困難なりし
に、曹長は勿躰ぶりて、あたりを徘徊し、只
口さきにて、指圖を爲すのみ、聊かも、力を
添ふることなかりき。
時しも、平服の一官吏、馬上にて、この處
をよぎりけるが、曹長の振舞を、餘りとや
見たりけん、立ち寄りて、會釋し、人手足ら

工兵一分隊と共に、さる處の壘の上に、梁材を引き上ぐる爲めに送られけり。人手足らざりしかば、工事いと困難なりしに、曹長は勿躰ぶりて、あたりを徘徊し、只口さきにて、指圖を爲すのみ、聊かも、力を添ふることなかりき。時しも、平服の一官吏、馬上にて、この處をよぎりけるが、曹長の振舞を、餘りとや見たりけん、立ち寄りて、會釋し、人手足ら

※

脱

ずと見えたるに、何故、足下には、手傳はれぬぞ。といふ。曹長、傲然として曰はく、足下は知られざるか、余は曹長なるを。と。官吏は、この答を聞きて、また言はず、やがて、徐かに、馬よりおりたち、手早く、上着を脱ぎ、下着一つとなりて、自ら、工兵の群に入り、汗いつるまでも手傳ひけり。やゝありて、工事は了りぬ。官吏は、改めて、曹長に向ひて、いふ様、この後、又、かゝ

悠然

慚

かゝる場合あらば、大總督まで通知せられ。と。かく言ひすてゝ、馬に跨り、悠然として立ち去りぬ。思ひかけきや、是れは、時の大總督ジールジ、ワシントンなりけり。曹長は深く慚ぢて、その後は傲慢をつゝしみけりとぞ。

第十八課 短篇一束

大穴の坊様

僧 庵

むかし、或里に、一人の僧住みしが、其の庵の傍に、柿の大木ありしかば、人あだ名して、大柿の坊様と呼びぬ。僧、快からず思ひて、其の木を切りけるが、切株残りしかば、人また、切株の坊様と呼びぬ。いよ快からず思ひて、切株を掘りて捨てけるが、大きな穴残りしかば、人また、異名して、大穴の坊様と呼びけり。

猿を捕る奇法

神

拳

亞弗利加の或地方にて、猿を捕ふるに、奇法を用ふ。まづ、瓢箪に、米をつめ、穴をあけて、之れを、樹の枝に懸け置く。猿來りて、穴より、手を挿し入れ、内なる米をつかむ。穴の大きさ、辛うじて、手を入るゝに足れど、拳を出だすに、適せざるなり。猿、狼狽すれども、拳を解くことを知らざるゆゑ、終に、獵夫に捕へらる、とぞ。

かんがるー

和蘭人某始メテ濠洲ニ渡リ何クレト

見アルキテ一々手帳ニ留メケルガタマ

く形鼠ニ似テ腹膨レ大キサ犬ホドノ

獸ヲ見タリケレバコレハ何ゾト和蘭語

ニテ尋ネケルニ土人かんがるート答フ

ヤガテ圖マデ添ヘテ本國

ニ報ジヤリシカバかんが

るートイフ獸ノ名全世界

ニ廣マリヌ。近年ノ調べニヨレバかん



がるートハ土語ニテ御言葉ノ意味ガ分
ラヌトイフコトナリケリ。

第十九課 王政維新

我が國は神武天皇の昔より天皇親ら
政權を執らせたまふならはしなりしが
源賴朝將軍となりて幕府を鎌倉に開き
てよりこのかた凡そ七百年政權武人の
手に遷りて朝廷はあれども無きが如く

※ 親 ※

※ ※

かくて後には、所謂公武の別、全く除かれ、士、農、工、商の階級も廢せられたり。隨

此の際、幕府の臣僚中には、尚ほ、政權の奉還を喜ばざるものありて、會津、桑名の二藩主を擁して、一時は、朝命に抵抗せしかど、それも亦た、程なくして平ぎたり。

翌、明治元年三月、天皇陛下は、天神、地祇

を祭らせたまひて、畏くも、五事の御誓約をせさせたまひき。その御旨意の大要は、下の如し。

第一、廣く、會議を興こし、萬の政事を、公論に決すべし。第二、上下、心を一にして、國益を圖るべし。第三、官民の差別なく、各、其の志を遂げしめて、志氣を活動せしむべし。第四、舊來の惡習を破りて、正道に就かしむべし。第五、智識を、世界に求

めて、皇威を發揚すべし。と。明治二十三年に、國會を開かせられしも、蓋し、此の御誓約に基かせられたるなり。

第二十課 市町村

人ノ、相集マリテ住ム處ヲ、其ノ大小、廣狹ニ應ジテ、市、町、又ハ村ト名ヅク。市ノ大ナルモノニハ、東京ノ如ク、人口百萬ニ餘ルモアレド、其ノ小ナルハ、人口三萬ニ

充

モ充タザルモアリ。町村ニモ、大小ノ差アリ。町ノ大ナルモノニハ、往々、三萬餘ノ人口アリテ、市トマガフ程ナルモアレバ、又、村ニマガフ程ニ小ナルモアリ。村ノ小ナルモノニ至リテハ、人口、僅カニ一千内外ニ過ギズ。

監督

市、町、村ト云フハ、何レモ、土地ト人民トヲ合セテ云フナリ。市、町、村、共ニ、其ノ公共事務ハ、監督ヲ、官ニ受ケテ、其ノ處理ヲ

※

パ、自ラス。カ、ル制度ヲ、自治制ト云フ。市役所、町村役場、市町村會等ハ、自治制ヲ行フ爲メニ設ケラレタル機關ナリ。

乃至

市、町、村ノ別ナク、ソコニ住ヘル人ヲ稱シテ、其ノ地ノ住民ト云フ。住民ハ、各、其ノ地、共有ノ建物、乃至、財産等ヲ使用スルコトヲ得ル代リニ、其ノ公共費用ヲ分擔スルノ義務アリ。例ヘバ、子弟ヲ、學校ニ入學セシメ、若シクハ、其ノ地ニ設ケラレ

讀

本

高等科生徒用卷四

四十六

富山房藏版

タル水道ノ水ナドヲ使用シ得ルノ權利
アルト共ニ、之レヲ維持シ又修繕スル費
用ヲ出ダスベキ義務アルガ如シ。

市、町、村ノ住民ニシテ、二箇年以上、其ノ
地ニ住シ、公共ノ費用ヲ納メ、且ツ、地租ヲ
納ムル者、若シクハ、直接國稅額二圓以上
ヲ納ムル者ヲ、公民ト稱ス。但シ、公民ハ、
滿廿五歳以上ノ男子ニシテ、一戸ヲ構ヘ、
且ツ、治産ノ禁ヲ蒙ラザルモノニ限レリ。

公民ハ、己レノ居住地ヨリ、市町村會議員
等ヲ選舉シ、又、名譽職トテ、其ノ市町村ノ
爲メニ、無給ニテ務ムル市町村長、並ビニ、
議員、委員等ニ推選セラル、コトヲ得。

第二十一課 商業のすゝめ

世界を相手の商業は、近くは、香港、
支那、印度、遠くは、亞米利加、歐羅巴、
取引廣き繁昌の、其のみなもと、は、信

億*	*	*	*	*	*
用ぞ。信用なくば、億萬の資本積むとも、かひぞなき。徳義守りて、信用を、世界に、もれなく廣むべし。	運を頼みの山仕事、相場、きは物、手を出すな。末の見込を、堅く立て、豫算、決算、嚴密に、貸借、損得、明細に、ちみちに、はしこく働けよ。	いざ、取引の便宜には、約束手形や、小切手や、爲換手形も重寶ぞ。また、			

値*	*	*	*	*
賣り廣めの段取りは、まづ、廣告を、第一に、見本、商標、特許權、つゝいて、登記、契約證、それ／＼の用を學ぶべし。	さて、金融を知らんには、その折々の値の高下、利子の上げ下げ、注意せよ。又、勤儉を旨として、常に、貯蓄を怠るな。信用、機敏、勤儉は、是れ、商業の三だから。			

第二十二課 法律

凡ソ、天地間ノ事物ニシテ、何等カノ法ニ從ハザルハナシ。法トハ、物事ノ定メナリ。法ニ二種アリ。自然ニ具ハレル物事ノ定メヲ、自然ノ法ト云ヒ、人ノ作レル定メヲ、規則、法律ナドト名ヅク。自然ノ法ニ戾レバ、病ヲ醸シ、死ヲ招ク。山モ、川モ草木モ、鳥獸モ、人間モ、自然法ニ戾リテ、安

全ナルコト能ハズ。

人ノ作レル法ハ、手近キハ、學校ノ規則、會社ノ規則ナドヨリ、上ハ、國ノ憲法、法律等ヲ含ム。就中、國民タル者ノ是非トモ守ラザルベカラザルハ、憲法、法律ナリ。法律ハ、國民ノ權限ヲ定メ、又、其ノ義務ヲ定ム。即チ、國民タルモノ、爲シ得ベキ限リト、爲スベキ務ト爲スベカラザルコトトヲ規定スルモノナリ。法律ナク

判安寧

バ、強キモノノミガ、權力ヲ有シテ、弱キ者ハ、シヒタゲラレ、國ノ安寧ト秩序トハ保チ難カルベシ。

第二十三課 人によりて法をまげず

伊勢の國の阿漕アサウが浦といふは、漁獵禁制の海にして、若し、犯す者あるときは、其の罰いと嚴しかりき。

時の紀伊侯の男に、徳太郎といふあり。

迷惑

侍童

*

紋

獵を好まれけるが、幼ければ、民家の迷惑に思ひやりもなく、侍童と共に、獵に出て、屢、田畑を荒されけり。されど、紀伊侯の威に畏れて、訴へ出づる者もなかりき。徳太郎は、次第に増長して、遂に、阿漕が浦に、網を入れられけり。役人出張して、止めけるに、徳太郎、傲然として、此の提灯の紋を見ずや。余は、紀伊大納言の子なるぞ。といひて、憚る色なし。役人驚きて

賣

文

萬葉集卷之五 後月著区

五十一

富山房藏

赦犯



馳せ歸り、かくと、その長
官に告げけり。
長官大岡忠右衛門之
れを聞きて、曰はく、たと
ひ、貴人なればとて、國法
を犯さば、決して赦すべ
からず。よし／＼吾れ
自ら行くべし。とて、次の
夜、下役人をつれて、出張

し、直ちに、主従を捕へんとす。

徳太郎、例の如く傲然として、無禮もの
何するぞ。余は、紀伊大納言の子なり、此
の提灯の紋を見ずや。余に對して、無禮
あらば、父君怒つて、汝等を罰したまふべき
ぞ。と言ふ。忠右衛門、聲を荒らげ、黙れ。紀
伊侯の御子ともあらう、貴人が、何とて、國
法を心得ざる筈あらんや。汝は、貴人の
名をかたる似せ者に相違なし。それ、此

碑

の惡童等を縛りあげよ、といへば、下役、走りかゝりて、徳太郎主従を縛しけり。

かくて、其の夜は、奉行所に留めおき、さて翌日になりて、主従を呼び出し、忠右衛門曰はく、汝等は禁制を犯したるのみならず、貴人の名をかたりたる不届者なり。嚴しく罰すべき筈なれども、特別の慈悲を以て、此の度だけは赦し遣はすなり。以後は、きつと慎むへし。とて、繩を解きて、放

慈悲

*

答

ちけり。

徳太郎、急ぎ逃れ歸りて、かくと、父の紀伊侯に告げられけり。されど、紀伊侯も、大岡の剛毅に感ぜられて、何の咎めもなかりき。

國法の大切なことをよく心得、貴人の威にも畏れず、人よりも、法を重んぜし、大岡の剛毅なる振舞は、感ずべきの至りなり。

國語讀本 卷四

高等小學校用

明治三十三年九月廿九日印

明治三十三年十月二日發

明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷

明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

（國語讀本為要附）

卷ノ一 定價	金拾八錢	卷ノ五 定價	金廿二錢
卷ノ二 定價	金拾八錢	卷ノ六 定價	金廿三錢
卷ノ三 定價	金貳拾錢	卷ノ七 定價	金廿三錢
卷ノ四 定價	金廿二錢	卷ノ八 定價	金廿四錢

著 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 東京市神田區墨神保町九番地 富 山 房

代 表 者 合資會社富山房社長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 者 東京日本橋區藥研堀町三十三番地 仁 科 衛

印 刷 所 同 所 厚 信 舍



發 兌 元

（明治廿九年九月設立）合資會社 富 山 房
 長距離（電話本局）電報 宅號 ヤマフ
 加入（一〇三六番）

